

「なぞ」と「なんぞ」の意味・機能 ——「など」との比較を含めて——

陳 連 冬*

キーワード: 例示 否定的評価, 同類 対立面, 文章語 口頭語, 単独用法 非単独用法, 明治期からの変化

要 旨

「なぞ」「なんぞ」は、「など」と同じように、① 複数の名詞を並列した 多項 ,あるいは同類のものごとの存在が読み取れる 1 項 の名詞に接続して、基本的に 肯定述語 で受けて、「例示」を示す、② 対立面と比較対照しながら 1 項 の名詞に接続して、基本的に 否定述語 で受けて、話し手の「否定的評価」を表す、という二つの基本的意味・機能を示すことを確認した。また、明治期から現代(1980年以降)にかけて両意味・機能のかかわりを見れば、「例示」用法から、「否定的評価」が発展したことも見られる。これは現実世界のものごとの関係を表す客観的な用法から、話し手による主観的(主體的)な用法への展開と見ることができるだろう。

ただし、明治期では、「など」「なぞ」「なんぞ」および「なんか」のいずれの形式も用いられていたが、現代では、「なぞ」と「なんぞ」は使用されなくなり、「など」と「なんか」だけが使用されるようになっている。すなわち、明治期と比べて、現代では、文章語は「など」へ、口頭語は「なんか」へ、という役割分担の方向に向かっている。意味・機能上の類似形式「など」によって、文章語から追い出された「なぞ」と「なんぞ」は、口頭語で強力なライバルの「なんか」に脅かされ、最後は消滅の道を歩んでしまったのだろう。

1. はじめに

「など」「なんか」と同じく、「なぞ」や「なんぞ」も「例示」の意味・機能を示す形式である。そして、それらはまた、「否定的評価」を示す場合もある。いままで、この二つの基本的な意味・機能にどんなかかわりがあるのか、また歴史的にどのように変化してきたのかについての研究はあまりなされていないように思われる。

本稿では、明治期と現代(1980年以降)という二つの時期の小説から、「なぞ」と「なんぞ」の

* Chen Liandong: 大阪大学大学院博士後期課程。

¹ 「なぞ」を「なんぞ」の縮約形と見る研究もあるが、本研究では別々に扱う。

実例を集め、そしてその類似的表現形式の「など」「なんか」などとも比較しながら、「例示」と「否定的評価」のかかわりおよびその歴史的変化について研究していきたい。「など」については、筆者の陳（2003）があるが、「なんか」については、調査はまだ完了していないので、現段階のデータと付き合い合わせながら、検討を行いたいと思う。

2. 「など」の意味・機能の変化

陳（2003）では、明治期も現代も盛んに用いられる「など」の意味・機能の変化について報告されている。要点をまとめると次のようになる。

分析に際して、次のような点に注目する。

- ① 「など」の前接名詞²が一つ（1項と呼ぶ）なのか複数（多項）なのか
- ② 「など」が 単独 で用いられるのか、非単独³ で用いられるのか
- ③ 文の述語が 肯定 なのか 否定 なのか

その上で、次のような指摘がされている。

1. 明治期には「統一性などない」のような 単独用法 は極めて稀であるが、現代では多い。現代における単独用法の特徴は、次の例のように、前接するのは 1項 であり、述語は 否定 であって、話し手の「否定的評価」を表していることである⁴。

文法的否定の場合

九月を過ぎてから大学に行くこともなくなっていた。卒論のことなど思い出しもなかった。（恋：331）

意味的否定⁵の場合

平木その人を前にしてみると、熱い思いが込み上げ、理性的な思考など、どこかに消えていった。（女た：311）

2. 一方、「一貫性、統一性などが（も）ある」のような 非単独用法 では、明治期と現代で違いが見られない。この場合は、次の例のように、前接するのは 1項 でも 多項 でもよく、述語は 肯定 が多い。前接のものごとと同類のものごとがあることを示す「例

² 名詞に接続する例が断然に多いので、名詞接続の場合を中心に議論した。

³ 「統一性などを求める」のように、格助辞や他のとりたて助辞と共起する場合を 非単独用法 と呼び、「統一性などない」のように、他の助辞と共起しない場合を 単独用法 と呼ぶ。

⁴ 単独用法 の中に次のような用法もあるが、陳（2003）では扱えなかった。「しかし一人六千円の出資金で始まった会は（中略）平和運動、反原発運動、第三世界の支援などあらゆる活動に結びついていった」。すなわち「N、N、N など N」から「N、N、N などの N」に置き換えられるような、連体修飾の関係に移行する用法である。この部分の 単独用法 は数はそれほど多くないが、「否定的評価」を表さず、「例示」を表す。

⁵ 文法的否定だけでなく、意味的な否定も含む。たとえば工藤（1999）では、「消える」は 欠如・消滅系の語彙的否定に属することになっている。陳（2003: 21）にも記述がある。

示」を表している。

明治期の場合

室には扇風器だの、唐机だの、特別にその唐机の傍に備え付けた電燈などがあった。(行人)

その上参禅の士を鼓舞する為か、古来からこの道に苦しんだ人の閱歴譚などを取り交せて一段の精彩を着けるのが例であった。(門)

現代の場合

自分だけが正しいと思う、奇妙な思い込みや、力みすぎ、自意識過剰などは、掃いて捨てるほど見てきた。(凍え: 100)

パジャマにジャンパーを羽織っただけのような連中に混ざって、身綺麗な服装で、髪を振り乱している若い女などが、強ばった表情で火災を見上げている。(凍え: 26)

3. 以上のことは、明治期から現代にかけて、「例示」という客観的なとりたての機能から、「話し手の否定的評価」という主体的な機能を明示する形式が発展してきたことを示しているように思われる。

3. 「なぞ」「なんぞ」の分析

3-1. 「なぞ」と「なんぞ」の分布

まず「なぞ」と「なんぞ」および「など」と「なんか」などの量的分布を挙げておきたい。明

表1 四形式の明治期と現代における分布

	明治期	現代
など	655	939
なぞ	235	0
なんぞ	361	9
なんか	182	433

治期と現代の、同じテキスト⁶を使って用例を集め、集計した。結果は、次のとおりである。

明治期では、四形式のいずれも用例が多く得られたが、現代では、「など」と「なんか」の用例はあるのに対して、「なぞ」と「なんぞ」はほとんど見られない。

⁶ 用例出典に一覧表を挙げるが、明治期の文献はさらに検討すべき問題があり、ここでは一応の目安としてみていただきたい。

表2 明治期におけるテキスト別の分布

	など	なぞ	なんぞ	なんか
仮名垣魯文『牛店雑談・安愚楽鍋』(明治4)	2	12	27	0
二葉亭四迷『浮雲』(明治20)	30	5	23	0
山田美妙『白玉蘭』(明治24)	12	2	4	0
夏目漱石『倫敦塔』(明治38)	4	0	0	0
夏目漱石『吾輩は猫である』(明治38)	206	12	33	66
島崎藤村『破戒』(明治39)	20	157	4	5
夏目漱石『坊ちゃん』(明治39)	30	2	9	22
夏目漱石『草枕』(明治39)	13	0	7	8
田山花袋『蒲団』(明治40)	25	3	1	1
夏目漱石『虞美人草』(明治40)	17	2	20	16
夏目漱石『三四郎』(明治41)	38	5	6	8
夏目漱石『それから』(明治42)	25	4	5	4
森鷗外『モタ・セクスアリス』(明治42)	24	12	43	1
森鷗外『半日』(明治42)	7	5	16	0
森鷗外『青年』(明治43)	14	5	77	4
夏目漱石『門』(明治43)	43	4	7	5
森鷗外『雁』(明治44)	14	2	44	5
森鷗外『妄想』(明治44)	4	0	6	0
夏目漱石『行人』(明治45)	69	1	5	20
夏目漱石『彼岸過迄』(明治45)	56	1	5	16
森鷗外『かのように』(明治45)	2	1	18	1
	655	235	361	182

次にテキスト別に四形式の分布を見よう。まず、明治期のテキスト別の分布である。

「など」はすべての作品に使われているが、「なぞ」は、一部の作品(島崎藤村『破戒』)に集中する傾向が顕著で、「なんぞ」にもある程度の偏りが見られる。「なんか」は特に早期の作品にはあ

表3 現代におけるテキスト別の分布

	など	なぞ	なんぞ	なんか
村上春樹『中国行きのスロウ・ポート』(1983)	3	0	0	16
群ようこ『無印失恋物語』(1991)	27	0	0	50
宮部みゆき『火車』(1992)	113	0	1	87
北村薫『水に眠る』(1994)	46	0	6	13
小池真理子『恋』(1995)	61	0	0	35
真保裕一『ホワイトアウト』(1995)	100	0	0	6
乃南アサ『凍える牙』(1996)	283	0	1	60
鷺沢萌『夢を見ずにおやすみ』(1996)	83	0	1	16
花村萬月『皆月』(1997)	59	0	0	49
篠田節子『女たちのジハード』(1997)	132	0	0	65
北村薫『ターン』(1997)	32	0	0	36
	939	0	9	433

まり使われていないようである。

現代では、「など」はますます主役の座をかちとるが、「なぞ」「なんぞ」は使われなくなっている。その代わりに、「なんか」はすべての作品に使われるようになっている。

表4 会話文・地の文における明治期と現代の違い

	明治期		現代	
	地の文	会話文	地の文	会話文
など	468	185	843	96
なぞ	115	120	0	0
なんぞ	126	235	1	8
なんか	18	164	74	359

明治期と現代における四形式の会話文・地の文における分布をあげると、次のとおりである。

以上のように、明治期から現代にかけて、四形式から二形式への収斂とともに、会話文・地の文における使い分けの傾向も顕著になっている。すなわち、「など」は明治期から現代にかけて、地の文において勢力が増加していくが、「なんか」は会話文において、増加していくのである。一方、「なぞ」と「なんぞ」は、明治期に会話文でも地の文でも用例が見られたが、現代では、会話文でも地の文でもほとんど見られなくなっている。

3-2. 明治期の「なぞ」「なんぞ」

さて、明治期における「なぞ」「なんぞ」の意味・機能は、どうであったのだろうか。基本的に「なぞ」「なんぞ」間に違いが見られないが、「なんぞ」はより話し言葉に偏る。また、次の1.に記した点を除けば、意味・機能上は、「など」との違いが見られなかった。

1. 次のような「形式名詞的用法」⁷は、「なぞ」に2例だけ、「なんぞ」に9例だけ見られた。

「なぞ」の例

- (1) 折柄四時頃の事とて日影も大分傾いた塩梅立駢んだ樹立の影は古廟の築壁を斑らに染めて不忍の池水は大魚の鱗かなぞのやうに燦めく。(浮雲: 35)

「なんぞ」の例

- (2) 随ってあらゆる祭やなんぞが皆内容のない形式になってしまっているのも、同じく当り前だとしているのではあるまいか。(かの)

また、次のような代名詞的な用法は、「なんぞ」にだけ見られた。3例だけある。

⁷ この名称は松村明編(1971)『日本文法大辞典』倉持保男氏担当の「など」の項目によった。「形式名詞」に関する筆者独自の規定はまだできていない。今後の課題としたい。

- (3) しばらくしたら、銘々洞間声を出して何か唄い始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱えたから、おれは唄わない、貴様唄ってみると云ったら、金や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちきりん。(坊ち)

明治期において、「なぞ」も「なんぞ」もすでに助辞としての用法が中心になっていた。

2. 「なぞ」と「なんぞ」には「など」と同様に、「例示」の意味・機能がある。

先行研究でも指摘されている「なぞ」「なんぞ」は、外に同類のものごとを含蓄する意味を表す形式から生まれたものだった。だから、並立助辞などによって並べられた複数の名詞——多項——に接続する「なぞ」と「なんぞ」は、常に——肯定・否定述語を問わず——「例示」の機能を示す。しかし、明治期の用例数を見ると、すでに多項に接続する用例は少ない。

「なぞ」の例

- (4) 土壁には大根の乾葉、唐辛なぞを懸け、粗末な葦簾の雪がこいもしてあった。(破戒)
- (5) 奥様を始め、お志保、省吾なぞは既に本堂へ上って、北の間の隅のところ集っていた。(破戒)

「なんぞ」の例

- (6) 自分の来た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の学生や、白い二本筋の帽を被った高等学校の生徒や、小学校へ出る子供や、女学生なんぞが、ぞろぞろと本郷の通の方へ出るのに擦れ違ったが、今坂の方へ曲って見ると、まるで往来がない。(青年)
- (7) 食物店の行燈や、蠟燭なんぞを売る家の板戸に嵌めた小障子に移る明りが、おりおり見えて、それが逆に後へ走るかと思うようだ。(杵夕)

多項の場合、基本的には述語は肯定であるが、次のように否定述語もある。

- (8) 僕がこんどの建白なぞ八実に国益の第一たるもので必ずしも一個の利潤に拘らず一国の富をなし我大皇神国の貴威を地球一円に輝かし億長不朽の深策を捧るのだから蚤の建言蚊のすねの兵力なぞと八同じうして論ずべからずサ。(安愚)
- (9) 新しい人はつまり道徳や宗教の理想なんぞに捕われていない人なんですか。(青年)

明示的に同類のものが並列される多項と違い、前接名詞が1項しか現れないとき、話し手が同類と考えたものごととは何かを探さなければならない。また、その前接名詞によって連想されるものごとは前接名詞と違う述語で結ばれる以上、同類のものごととして考えてよいかどうか、などの問題が浮かび上がってくる。1項の場合の、前接名詞とその対応するものごととの関係を探ることは「なぞ」と「なんぞ」の研究の第一歩であろう。

まず、前後の文脈の中から、同類のものごとが見つかるものを考えよう。この場合の「なぞ」「なんぞ」も「例示」の機能を示す。つまり 多項 に準ずるものである。

「なぞ」の例

- (10) 丑松はまた見たり聞いたりした事実を数えて、あるいは追われたりあるいは自分で隠れたりした人々、父や、叔父や、先輩や、それからあの下高井の大尽の心地を身に引比べ、終には娼婦として秘密に売買されるという多くの美しい穢多の娘の運命なぞを思いやった。(破戒)
- (11) 何処か敬之進に似たところでもあるか、こう丑松は考えて、それとなく佛を捜して見ると、若々しい髪のかたち、額つき——まあ、どちらかと言えば、あの省吾は父親似、この人はまた亡くなったという母親の方にでも似たのであろう。「眼付なぞはもう彷彿さ」と敬之進も言った。(破戒)

「人々」と「穢多の娘(の運命)」と、「髪のかたち」「額つき」と「眼付」とは同類同士の関係と考えられ、「なぞ」は「例示」の機能を示す。

同レベルの名詞概念に限らず、上位概念などが示されて、同類を推測する場合もある。

- (12) 悪徳新聞のあらゆる攻撃を受けていながら、告別の演説でも、全校の生徒を泣かせたそうである。それも一時の感動ばかりではない。級ごとに記念品を贈る委員なぞが出来たとき、殆ど一人もその募りに応ぜなかったものはないということである。(青年)
- (13) 一体、父が家畜を愛する心は天性に近かったので、随って牧夫としての経験も深く、人にも頼まれ、牧場の持主にも信ぜられた位。牛の性質なぞはなかなか克く暗記していたもの。(破戒)

「級ごとに」から複数の「記念品を贈る委員」があると考えられ、「家畜を愛する」「牧夫としての経験も深く」から「(牛の)性質」のほかにも「牛」に関するさまざまな側面を想像できるだろう。上位概念「級」対下位概念「委員」のような場合も「例示」の機能を示す。

1 項 の「なんぞ」の例も同じである。まず、同類が前後の文に具体的に見つかる場合

- (14) 秀麿はお母あ様に、(中略)とうとう笑いながら、こう云った。「一番つまらない季節ですね。誰も彼も旅行してしまいます。若い娘なんぞがスウィツルに行つて、高い山に登ります。(後略)」(かの)
- (15) この役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。しかしその或る物は目を醒まそう醒まそうと思いながら、又してはうとうとして眠ってしまう。この頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行って浮いているのに、どうかするとその揺れるのが根に響くような感じであるが、これは舞台上でしている役の感じではない。(妄想)

上位概念から同類の存在を推測できる場合

(16) そして思量の体操をする積りで、哲学の本なんぞを読み耽っているのである。(かの)

(17) 現世界は奇蹟の多きに堪えない。金なんぞも大いなる奇蹟である。(青年)

1項の場合の「例示」は、述語が否定形で結ばれる例はない。

以上のように1項の場合でも、文脈の手伝いで前接名詞に同類を連想させて「例示」の用法を完成させている。しかし次の例などでは、文脈からの連想で同類のものごとがあるとは思われない。次節のように述語が否定ならば、対立面が前面化するが、その一歩手前である。

(18) 「しかし、戯語じゃ無いよ」と言う銀之助の眼は輝いて来た。「僕なぞは師範校時代から交際って、能く人物を知っている。あの瀬川君が新平民だなんて、そんなことが有って堪るものか。(後略)。(破戒)

(19) 「それに実際えらいのでしょう」「えらいのですとも。君、オオトリシアンで、まだ若いのに自殺した学者があったね。Otto Weininger というのだ。僕なんぞはニイチェから後の書物では、あの人の書いたものに一番ひどく動されたと言ってもいいが、あれがこう云う議論をしていますね。(後略)。(青年)

これには、代名詞類、特に一人称代名詞が前接名詞になった場合が多い⁸。

しかし、述語に否定的な意味が伴えば、「否定的評価」の方に移行するのであろう。

(20) こう言って、何か思出したように嘆息して、「近頃の人物を数えると、いずれも年少気鋭の士ですね。我輩なぞはこの年齢に成っても、未だ碌々としているような訳で、考えて見れば実に御恥しい」(破戒)

実際、一人称代名詞を中心とする人間関係を表す一連の形式が前接名詞になった場合、特に一方を下げたり他方を上げたりすることが多く、そこから否定的評価を含蓄する用法⁹が生まれ、3.の「否定的評価」に発展する可能性を含むのであろう。

3. 「なぞ」と「なんぞ」には「など」と同様に、「否定的評価」の意味・機能もある。

あるものごとと比較対照しながら前接名詞を取り立てる場合、そのあるものごとは同類ではなく、対立するものごと——対立面と呼ぶ——となる。対立面と前接名詞との関係には、二つのタイプがある。対立面を否定的に捉えて前接名詞を肯定的に捉える 対立面否定・前接名詞肯定の場合と、対立面を肯定的に捉えて前接名詞を否定的に捉える 対立面肯定・前接名詞否定の場合がある。「なぞ」「なんぞ」はここでは「例示」を表さず、「否定的評価」の機能を示す。

⁸ この現象を理論的にどう位置づけるかはまだよくわからないが、指示性を持つ代名詞が多いことのほかに、主語の場合に多く見られることもあげられるようである。

⁹ 山田(1995: 339)に、一人称および二人称代名詞類に後続する場合に、話し手の評価を暗示する用法が多いという指摘がある。

「なぞ」: 対立面否定・前接名詞肯定

- (21) 「ははははは．して見ると，勝野君なぞは開化した高尚な人間で，猪子先生の方は野蛮な下等人種だと言うのだね．ははははは．僕は今まで，君もあの先生も，同じ人間だとばかり思っていた」(破戒)
- (22) 「(前略)．我輩の面白いと思うことを，瀬川君なぞは一向つまらないような顔してる．我輩のつまらないと思うことを，反って瀬川君なぞは非常に面白がってる．畢竟一緒に事業が出来ないというは，時代が違うからでしょうか(後略)．」(破戒)

「なぞ」の一文を見ただけでは，2. で見た 1 項・肯定 と違わない．2. では，文脈から見つかるのは同類のものごとであるが，ここでは，相対立するものごとが見つかる．したがって前接名詞に対する 肯定 は，結果的に 対立面 に対する否定になる．(11) を例にすれば，「彷彿」であるのは「眼付」だけでなく，「髪のかたち」も「額つき」も「彷彿」である．しかし(21)では，「開化した高尚な人間」なのは「勝野君」だけであって，「猪子先生」に対しての述語は，その反対の意味の「野蛮な下等人種」である．「例示」と「否定的評価」の橋渡的存在であろう．

次は 対立面肯定・前接名詞否定 の例である．

- (23) 「(前略)．実に月日の経つのは早いものさ．いや，我輩なぞが老込む筈だよ，君等がずんずん進歩するんだもの．我輩だって，君，一度は君等のような時代もあったよ．(後略)」(破戒)

否定述語をとる場合の 対立面肯定・前接名詞否定 は，規則的に「否定的評価」を示す．

- (24) この娘は(中略)．洗髪を島田に結っていて，赤い物なぞは掛けない．夏は派手な浴衣を着ている．冬は半衿の掛かった銘撰か何かを着ている．いつも新しい前掛をしているのである．(中夕)
- (25) その日に限っては，妙に生徒一同が静粛で，参観人の居ない最初の時間から悪戯なぞを為るものは無かった．極りで居眠りを始める生徒や，狐鼠々々机の下で無線電話をかける技師までが，唯もう行儀よくかしまっていた．(破戒)

このように，「否定的評価」を表すために，対立面との張り合いによって2. の「例示」と一線を画する 対立面否定・前接名詞肯定 ，否定的意味を伴う肯定形の述語による 対立面肯定・前接名詞否定 ，および否定形を取った述語による 対立面肯定・前接名詞否定 ，の三者が用いられていると思われる．

「なんぞ」も同じことが言える．まず， 対立面否定・前接名詞肯定 の場合である．

- (26) 「(前略)．それから猶読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ．露西亞と戦争が始まって若い人達は大変な辛苦をして御国の為に働らいているのに節季師走でもお正月の様に気楽に遊んでいると書いてある．(後略)」(吾輩)

次は 対立面肯定・前接名詞否定 の場合である。

- (27) 「あんな人だからあんな人と云ふのだわ。あなたの側にひつ附いてみて話をするのは好でせうが、子供の世話なんぞは大嫌なのです。丸でああなたの女房気取りで。(後略)」(半日: 41)

さらに、述語が否定形をとった場合である。

- (28) その日の夕かたであった。古賀が一しよに散歩に出ると云う。鰐口なんぞは、長い間同じ部屋にいても、一しよに散歩に出ようと云ったことはない。(中夕)

- (29) それは越した日に八百屋も、肴屋も通帳を持って来て、出入を頼んだのに、その日には肴屋が来ぬので、小さい梅を坂下へ遣って、何か切身でも買って来させようとした時の事である。お玉は毎日肴なんぞが食いたくはない。酒を飲まぬ父が体に障らぬお数でさえあれば、なんでも好いと云う性だから、有り合せの物で御飯を食べる癖が附いていた。(雁)

(30) は「法帖なんぞを」から見れば、(26)と同じ例だが、「篆刻なんぞには」から見れば、(28)(29)と同じ組に入れなければならない例になる。

- (30) (前略)、為合せな事には一方の隣が博物館の属官で、法帖なんぞをいじって手習ばかりしている男、一方の隣がもう珍しいものになっている板木師で、篆刻なんぞには手を出さぬ男だから、どちらも爺いさんの心の平和を破るような虞はない。(雁)

以上の「否定的評価」の例は、格助辞やとりたて助辞を伴った 非単独用法 だったが、では、単独用法 は、どうあろうか。「など」の場合は、明治期にほとんどなかったのに、現代においては非常にたくさん見られるようになった。しかし「なぞ」「なんぞ」は、現代では言うまでもないが、明治期においてもあまり多くは見られなかった。「なぞ」は3例しかない。

文法的否定の場合

- (31) 「(前略)ちょッ、何ぞと言うと、直に口答えだ。父さんが過多甘やかすもんだから、母さんの言うことなぞ少許も聞きやしねえ。(後略)」(破戒)

文法的形式は肯定であるが、意味的には否定の場合

- (32) 「それから、あの」とお志保は考深い眼付をしながら、「瀬川さんのことなぞ、それは酷い悪口を仰いましたよ。その時私は始めて知りました」(破戒)

「なんぞ」の 単独用法 は「なぞ」よりやや用例数が多いが、いずれも 1項 であり、肯定形述語は16例、否定形述語は12例ある。

文法的否定の場合

- (33) そしてこんな事を思う。あの蝙蝠傘を買って来て貰った時、わたしはどんなにか喜んだらう。これまでこっちから頼まぬのに、物なんぞ買って来てくれたことはな

い. (雁)

文法的形式は肯定であるが、意味的には否定の場合

- (34) 「(前略) . それこそ上田君から笑われるばかりだ . 第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないじゃないか . 失礼だが寒月君はやはり実験室で珠を磨いてる方がいい . 俳劇なんぞ百作たって二百作たって、亡国の音じゃ駄目だ」寒月君は少々憤として、(後略) . (吾輩)

4. 対立面も消えた場合

3. に連続すると思うが、一部の用例では、対立面が消えている . つまり、対立面とのコントラストをたよりに成立していた「否定的評価」は、対立面がなくても成立することがある . 次の用例のように、指示詞を用いられていることから、3. とのかかわりが窺われる一方、具体的に何を指すかは定かでない . 典型的なとりたて助辞から見れば、少しずれていると思われるが、対応するものごとや対立するものごとよりも、文末表現——否定形式——との共起関係が目立つ .

「なぞ」の例

- (35) 「ほほほほほ——これまでのことを考えてみましても、そんな日なぞは参りそうも御座ません . まあ、私が貰われて行きさえしませんければ、蓮華寺の母だってもあんな思はずに済みましたのでしょ . (後略)」(破戒)
- (36) 代助自身の今の傾向から云うと、到底人の為に判なぞを押しそうにもない . 自分もそう思っている . (それ)

「なんぞ」の例

- (37) 「文三計りぢゃ無い本田さんにだつても然うだよ . 彼様に昨夜のやうに遠慮の無い事をお言ひでないよ、ソリやお前の事だから正可そんな.....不埒なんぞ八お為ぢゃ有るまいけれども今が嫁入前で一番大事な時だから」(浮雲: 62)
- (38) 「(前略) . 馬鹿らしい . 財産といふ程のものはないのだから、遺言状なんぞは一体入らないのだ . お父様が生きて入らつしやつて、おれの兄弟が内にゐた頃の事を考へて見ると、内ぢゆうで誰も死んだらどうの、金がどうのといふやうな事を考へてゐたものはないのだ . (後略)」(半日: 39)

以上のように、多項 の場合は、同一の述語で受けた複数のものごとは同類となり、客観的な「例示」の意味・機能を示すが、前接名詞が 1 項 になった場合、同類のものごとは別の述語で受け、相反する評価をされる可能性が出てくる . ここでは、社会的関係の中で対照的に捉えられた人間関係、特に話し手のことを下げて表現することが多いことから、話し手の否定的評価を含意して表現する用法が成立し、それが「否定的評価」の意味・機能につながったのであろう . さらに 対立面 を頼りに成立していた「否定的評価」は、ある場合には 対立面 抜きで成立することもある . 実証的な裏づけは今後の課題とするが、この現実世界のものごととの関係を現す

客観的表現から、話し手による否定的評価を表す主観的(主體的)表現への展開の関係は、次のような構図で示されよう。

多項・肯定 / 否定 同類 同一述語 「例示」	↔	1項・肯定 同類 異なる述語 「例示」	↔	1項・肯定 / 否定 対立面 異なる述語・対比 「否定的評価(話し手自身のこと)」	↔	1項・否定述語 対立面の欠如 否定述語 「否定(的判断)」
----------------------------------	---	------------------------------	---	--	---	--

3-3. 現代の「なぞ」「なんぞ」および明治期とのかかわり

現代の「なぞ」と「なんぞ」に関しては、まず、3-2.の1.の「形式名詞的用法」と「副詞の用法」が見られなくなったことがあげられよう。助辞化が進んだといえる。ただし、助辞の用法自体が、ほとんど見られなくなっている。

まず、「なぞ」について、

1. 現代の小説では0例であった。検証のために、論述文7編¹⁰を調査したが、ここでも0例であった。エッセイ4編¹¹を調べたところ、次の小塩節(2002)『木々を渡る風』の1編のみで5例だけ使用されていた。

(39) 静かなその声には、おそろしいほどの威力があつて、追い出された客を見たことも何度かある。料金なぞむろん取らぬままだ。昔かたぎの、いっこく者である。(木々: 86)

(40) この望月先生が体調を崩されたと聞いて、お見舞に行こう、ということになったのである。我々が行ってもお邪魔するだけで、お見舞なぞにはけっしてならぬのだが。(木々: 151)

(41) 先生が偉い。静かになぞなりっこない、やんちゃな幼児たちの心をこれだけつかんで語って聞かせ、自然に覚えるように心に沁みこませてしまう。(木々: 200)

5例はすべて「否定的評価」の例であつて、「例示」の用法はない。使用者ならびに意味・機能が限定されてくることは、すでに消滅への道を歩んでいることを示していると思われる。

2. 明治期でも、「なぞ」よりも「など」の使用例が多かった。しかも、「なぞ」の231例の使

¹⁰ 古森義久(1995)『大学病院で母はなぜ死んだか』中公文庫(1998)、大林太良(1990)『東と西 海と山』小学館(1996)、岡田光世『ニューヨーク日本人教育事情』岩波新書(1993)、田中宏『在日外国人』岩波新書(1991)、岡田英弘(1997)『この厄介な国、中国』WAC BUNKO(2001)、金田一春彦『日本語を反省してみませんか』角川 ONE テーマ(2002)、和田正平(1994)『裸体人類学』中央公論社。

¹¹ 小塩節(2002)『木々を渡る風』新潮文庫、原口純子と中華生活ウオッチャーズ(2002)『踊る中国人』講談社、林信吾(2003)『これでもイギリスが好きですか?』平凡社新書、岩月謙次(2002)『女は男のどこを見ているか』ちくま新書。

¹² 明治前期の仮名垣魯文(明治4)『牛店雑談・安愚楽鍋』にも「など」より「なぞ」の用例が多い。江戸期の流れと思われるが、さらに他の作品を調べる必要がある。

用のされ方を見ると、島崎藤村に偏っている¹²。従って、明治期においてもすでに、同じ意味・機能の「など」の方が中心的形式になっていたと思われる。

一方、「なんぞ」については、

1. 「なんぞ」は、現代の小説において9例しか見つかっていない。「なぞ」と同じようにあまり使われなくなった形式といえよう。内訳を見ると、会話文8例、地の文1例あるが、意味・機能は「否定的評価」も「例示」もあるが、多項のものはない。

まず会話文の用例である。非単独用法・1項で、(42)は「例示」で、(43)は同類のものごとに対立面も見つからない中間的な例である。(43)は指示性のある人称代名詞が主語の位置にあることがかかわっているであろう。

- (42) 怒鳴られました。ええ、ティッシュを口に押し込んでいたんです。そんな話を新聞か何かで読んだ気がしますから、それでやってみたんですよ。洗剤なんぞを食すというのもあるそうで、これはぞっとしませんからな。へへ。(水に: 181)
- (43) 「(前略)。そうやって買わせる品物は、家電製品から装飾品までいろいろですが、多いのは新幹線のチケットでね。これが、金券屋に流れて格安チケットになる。そういうのを買って、私なんぞも出張にいくわけです。なにせ、安いですからな」(火車: 186)

次は 単独用法・否定述語 で「否定的評価」を表すものである。

- (44) 「通報者が、そう言うんだそうだ。隣近所のこともあるから、サイレンは鳴らさないで来て欲しいってことなんだがな。勿論、相手は犬なんだから、サイレンなんぞ鳴らさなくたって、自分の身に危険が迫ってると感じりゃあ、するりと逃げ出すだろうとは、思うがね」(凍え: 437)
- (45) 堀田先生は違った。野人です。ずけずけものをいう。お前なんぞ使えないと、皆の前で怒鳴られましたよ。相手があの人だとね、こっちは、それで、もうおしまい。どうにもならない大根、ってことになっちゃう。(水に: 186)

しかし、次の 単独用法 は同類のものごとの存在が考えられそうである。

- (46) それなのに通っちゃいましてね。すぐに出演です。図々しいといえば、これも図々しい。最初の内は、二十七、八で学生服を着ましてね、高校生の役なんぞやってたもんです。(水に: 173)

一方次の例は、同類のものごとは考えられないようである。(43)に近い。

- (47) ——へへ、いかがです。迫真の演技でしょう。昔の野球と、今がごっちゃになっちゃった。そういったところですよ。嫁なんぞ、本当にびっくりしておるおるしちまいましたよ。あたしも罪だね。(水に: 186)

地の文の例は一つだけある。単独用法 で「否定的評価」を表すものである。

- (48) 真梨子に会いたいという気持ちなんぞこれっぽちもなかったが、約束してしまった以上は会いに行くことになるだろう。(夢を: 129)

以上のように、最も典型的な 多項 の「例示」用法はすでに見られなくなったこと、中間的用法もあるが 1 項・肯定述語 では「例示」の用法が確認できたこと、1 項・否定述語 では「否定的評価」が確認できたことなどは、特徴として挙げられるとはいえ、何よりも用例数がこれほども少なくなったこと自体が何より注目されるべきことであろう。

2. 明治期における「なんぞ」は、「など」より使用例が少ない点で、「なぞ」と同じである。ただし、「なぞ」ほど特定の作品に偏る傾向はなく、用例数もある程度ある。1980 年以降のことをあわせて考えれば、「なんぞ」は、「なぞ」より一步遅れてはいるものの、「なぞ」と同じように消滅の方向へ向かい始めていたと思われる。

3-4. 「なぞ」「なんぞ」と「など」および「なんか」との競合的变化

「なぞ」「なんぞ」を含む諸形式の明治期から現代における変化について、形式的分布および意味・機能の点から、次のような仮説が提示できよう。実証的研究は今後の課題である。

- (1) 「など」はまず「例示」という客観的な意味・機能が成立し、後に他者との比較の中で、話し手の「否定的評価」を示す主観的(主體的)な意味・機能が成立したという仮説が正しいければ、「なぞ」や「なんぞ」も「など」と同じような経路をたどったと思われる。明治期においては、最も本来の用法とされる「例示」がかなり弱勢になっている。そして現代においては、「なぞ」も「なんぞ」もほとんど用いられなくなっている。
- (2) 「なぞ」と「なんぞ」とは互いに意味・機能上の差が見られなかっただけでなく、「など」との違いも見られなかった。意味・機能上の違いがないとすれば、形式の統合が生じて当然であろう。明治期において「など」に対して「なぞ」と「なんぞ」は、使用量も相対的に少なく、使用者にも限定が起こっている。意味・用法上、多項 による「例示」の用法は少数派であったし、現代では 多項 の用法は 1 例も見られない。また明治期「なぞ」「なんぞ」の 1 項 の用例を観察すると、単独用法 は未発達であった。以上のことを総合すれば、「なぞ」「なんぞ」は「など」と違って、それぞれの意味・機能を代表する形態を発達させることを待たずに、消滅の道へと歩み始めていたのである。
- (3) 地の文においては、同じ意味・機能の「など」が、明治期から現代にかけて、勢力を増していくので、「なぞ」「なんぞ」は江戸時代に引き続き、明治期も会話文の方に限定される存在であった。しかし会話文においては、明治期から助辞用法の「なんか」が盛んに用いられ始めた。「なんか」も意味・機能の面¹³で非常に活発で強力なライバルとなっ

¹³ たとえば、単独用法 を明治期から多く持っていたなど、個性が強い。詳しくは別稿でのべたい。

た。すなわち「なんか」の出現によって、会話文においても、「なぞ」「なんぞ」の存在は脅かされた。後は消滅の道しかなかったのであろう。

- (4) 「なぞ」「なんぞ」の消滅と対照的に、「なんか」は「など」に似た意味・機能を持っているのに、減少するどころか増加の傾向にある。文章語と口頭語とで「など」と「なんか」を使い分けよう、という分担傾向がその消滅の危機を脱する原因だったかもしれない¹⁴。

4. 今後の課題

「例示」「否定的評価」を表す諸形式の中の他の形式と比べて、「なぞ」「なんぞ」は消滅していくものであった。しかし「なぞ」「なんぞ」の消滅の上に、現代の「など」と「なんか」などが活躍しているのである。「なぞ」「なんぞ」を知らずに、現在の「など」「なんか」の本当の姿を理解したとはいえない。また日本語教育の現場で、特に上級レベルになると、明治期の文献講読が出てくる。学生が直接「なぞ」「なんぞ」に接する機会も出てくる。教育的実用性の面からも「なぞ」「なんぞ」は抑えておくべきものである。

今後、「なぞ」「なんぞ」だけでなく、「など」「なんか」「なんて」などの諸形式を全部個々に研究した上で、それらを総合的に捉えることができれば、個々の研究の意義も生きてくるであろう。

付 記

本稿は、実に多くの方々のご協力を得ました。編集委員会から大変懇切で貴重なアドバイスを頂きながら、課題がたくさん残る形に終わりました。また本研究は、大阪大学の指導教官工藤真由美先生の指導の元で行われました。更に論文作成の段階では、青木由香氏及び同ゼミの皆さんにご協力を頂きました。記して御礼申し上げます。

¹⁴ 粗い言い方になるが、時代差と文体、および意味・機能などの諸要素を取り入れて、表にすると、次のような構図になるう。

	明治期	現 代
文章語	など、なぞ、なんぞ(なんか)	など(なんか)
口頭語	なぞ、なんぞ、なんか、など	なんか(など)

	明治期	現 代
文章語	例示・否定的評価	否定的評価・例示
口頭語	例示・否定的評価	否定的評価・例示

ただし現代において、会話文に「など」がないわけではないから、単純に片付けられないようである。

【用例出典】

下線は出典を示すときの略称である。

【明治期の小説】

島崎藤村『破戒』（明治39）、田山花袋『蒲団』（明治40）、夏目漱石『坊ちゃん』（明治39）、『それから』（明治42）、『倫敦塔』（明治38）、『吾輩は猫である』（明治38）、『虞美人草』（明治40）、『行人』（明治45）、『三四郎』（明治41）、『草枕』（明治39）、『彼岸過迄』（明治45）、『門』（明治43）、森鷗外『かのように』（明治45）、『青年』（明治43）、『ヰ夕・セクスアリス』（明治42）、『雁』（明治44）、『妄想』（明治44）（以上は新潮文庫 CD-ROM『明治の文豪』より）、森鷗外『半日』（明治42）（明治文学全集27 筑摩書房）、山田美妙『白玉蘭』（明治24）（明治文学全集23 筑摩書房）、仮名垣魯文『牛店雑談・安愚楽鍋』（明治4）（明治文学全集1 筑摩書房）、二葉亭四迷『浮雲』（明治20）（明治文学全集17 筑摩書房）。

【80年以降現代の小説】

村上春樹（1983）『中国行きのスロウ・ボート』中公文庫（1986）、北村薫（1997）『ターン』新潮文庫（2000）、篠田節子（1997）『女たちのジハード』集英社文庫（2000）、鷺沢萌（1996）『夢を見ずにおやすみ』講談社文庫（1999）、小池真理子（1995）『恋』ハヤカワ文庫（1999）、花村萬月（1997）『皆月』講談社文庫（2000）、群ようこ（1991）『無印失恋物語』角川文庫（1992）、真保裕一（1995）『ホワイトアウト』新潮文庫（1998）、北村薫（1994）『水に眠る』文春文庫（1997）、乃南アサ（1996）『凍える牙』新潮社文庫（2000）、宮部みゆき（1992）『火車』新潮文庫（2000）。

参 考 文 献

- 植田瑞子（1991）「現代語における副助詞ナドの分布と特性」『日本語学』10-5, 明治書院。
 奥津敬一郎他（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』, 凡人社。
 加波尚子（1995）「副助詞「など」について——とくに「否定的強調」「軽視・謙遜」の意味を帯びる場合について——」『国文論叢』23(神戸大学)。
 工藤 浩（1977）「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会編『国語学と国語史』, 明治書院。
 工藤真由美（1999）「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」『現代日本語研究』第6号(大阪大学)。
 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』, 秀英出版。
 此島正年（1966）『国語助詞の研究——助詞史素描——』, 桜楓社。
 佐久間鼎（1940）『現代日本語法の研究』, くるしお出版, 1983改訂。
 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』, むぎ書房。
 陳 連 冬（2003）「名詞に接続する「など」の意味・機能——明治期と現代との比較を中心に——」『待兼山論叢』第37号, 大阪大学文学会。
 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』, くるしお出版。
 沼田善子（2000）「3 取り立て」, 金 水 敏, 工藤真由美, 沼田善子『時・否定と取り立て』, 岩波書店。
 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編（1995）『日本語の主題と取り立て』, くるしお出版。

松村 明編（1971）『日本文法大辞典』, 明治書院 .

森田良行（1980）『基礎日本語 2』, 角川書店 .

山田敏弘（1995）『ナドとナンカとナンテ——話し手の評価を表すとりたて助詞——』, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』, くろしお出版 .

湯沢幸吉郎（1957）『江戸言葉の研究』, 明治書院 .